

おおご
大胡林業研究会

群馬県前橋市堀越町

設立 昭和59年4月1日

会員 男13人

年齢 26歳～59歳 平均41.5歳

主なプロジェクト

- 椎茸栽培技術の向上

きのこ栽培技術と生産性の向上をめざして

1. 地域の概要

大胡林業研究会が活動している旧大胡町は、平成16年12月の市町村合併により前橋市となった。

旧大胡町は県中央部の赤城山南麓に位置し、標高は120mから640mで南から北に向かって標高差520mの上り傾斜面で、中心部を荒砥川が流れ、冬季は季節風が強いが比較的温暖で自然に恵まれた地域である。

合併前の旧大胡町の人口は17,298人で、前橋市のベッド・タウンとして、徐々にではあるが増加してきている。面積は1,976haであり、そのうち、林野面積は174haと少ないため、造林などの林業従事者は5人しかおらず、その他の林業関係者としては椎茸を中心としたきのこ生産者が主体となっている。

旧大胡町の生産物は米麦をはじめ、野菜や花木等の農産物が中心である。特にきのこ類の生産は3,500tとなっており、県内でも有数の生産地であり、当町の重要な産業として、農林家の経済にも大きな役割を果たしている。

きのこ類の生産は増加傾向にあるが、今後は産直と市場販売を両輪と

した安定供給を図るため、計画的な生産と経営の合理化を図る必要がある。

また、これらのきのこの増産体制を推進することが課題となっている。

2. グループ結成のあらまし

本会は椎茸生産者で組織されている大胡町椎茸出荷組合の若手が中心となり、栽培技術の向上を図るため、昭和59年に青年グループとして発足したのが前身である。

更に、町内のみならず、県内外との技術・意見交換を図る必要があるため、名称を「大胡町林業研究会」とし、群馬県林研グループ連絡協議会へ参入した。

発足当時は仲間づくりを中心に行い、経営規模にとらわれず、相互に知識を高め、栽培技術の向上をめざした意見交換を主体に活動してきた。

また、活動の一環として、平成元年度から平成5年度まで、そして平成16年度、平成17年度には県の栽培指導と助成金を受け、椎茸の発生試験、品種選定試験などを実施し、その成果は町内はもとより他の地域でも高い評価を得ている。

大胡町の前橋市への合併により、本年4月、名称を「大胡林業研究会」に変更した。また、平成17年度末で6名になっていた会員も新規加入を募った結果13名となった。会員の経営内容は、原木栽培を主体とした椎茸栽培を行っている。年齢構成は26歳から59歳と幅があり、平均年齢は41.5歳である。

本会は群馬県林研グループ連絡協議会の中でも、研修会、講習会等の各種行事には積極的に参加している。また、本会の総会や各種事業においても会員の出席率が85%以上と高く、活発な活動を展開している。

また、本会の中では年長者を中心に先導的な会員がおり、後継者の育成指導をはじめ、栽培技術の普及にも努めている。また、積極的に新しい栽培技術を試行するとともに各方面からの情報を把握し、その研究と普及を行うなど、きのこ生産者としてのみならず、地域でのリーダー

として活躍している。

3. グループの活動状況

本会は結成以来、毎年、会の課題を話し合い、計画的に活動している。また、県の指導を受け、栽培技術向上のため、発生試験、品種選定試験等をはじめ、次の各種事業を実施した。

(1) 原木椎茸の発生試験、品種選定試験

椎茸栽培技術を確立するため、平成2年度に原木椎茸の発生試験として、種駒の深植えと浅植えによる発生状況の調査を実施した。

また、大胡地域に適した椎茸品種を選定するため、品種選定試験として平成16年度から新品種の植菌、栽培試験を実施している。試験品種の収穫も始まっており、その結果は、会員をはじめ、地域の椎茸生産者へ普及し、良質椎茸の栽培に役立てたいと考えている。

(2) 菌床椎茸の試験栽培

会員のほとんどが原木椎茸栽培であったことから、会の発足当初から椎茸栽培技術の向上を図ってきた。しかし、コナラ等の椎茸原木の不足や価格の上昇に加え、生産者の高齢化が顕著であったことから、従来の原木栽培に加えて、平成5年度には県の協力を得て菌床椎茸の試験栽培を実施した。

(3) ハタケシメジの試験栽培

平成6年度、食品類の本物志向が高まっている中、きのこ栽培においても野生きのこの栽培技術の確立に向けた要望が多かったため、野生きのこである「ハタケシメジ」の栽培技術を開発し、林業経営の改善を図る目的で試験栽培を実施した。

この試験ではバーク堆肥と米ヌカを培地としたブロックを300袋作成した。これを滅菌、植菌したものを自然培養した上で、林内に伏せ込んだ。その結果、10月から11月に約2.5kgの収穫があり、会員夫人の協力を得て試食会を開催した。

(4) 里山・平地林の整備

地元大胡地域の平地林をきれいにするため、県の支援を受け、下草刈り、枝打ち、間伐を平成13年度から平成15年度に実施した。皆で汗を流すことにより、会員相互の親睦が図れ、減少傾向にあった会員の結束力の強化となった。

(5) 椎茸駒打ち体験指導

平成14年度には県の事業に協力し、大胡小学校の3年生136人に原木にドリルで穴をあける方法や種駒の打ち方などを教えた。会員の持っている椎茸栽培技術が児童の学習に役立ち、会員は終始にこやかに児童に接していた。

(6) 各種研修会等

椎茸品評会をはじめ、榎木コンクール等に積極的に出品し、品質と栽培技術の向上を図っている。

また、新しい技術の習得に努めるとともに、会員相互の技術・意見交換を深めるため、地区林研や県林研主催の各種研修会等にも積極的に参加してきた。特に本会が実施している視察研修会は会員の出席率が高くなっている。更には、家族を含めた参加による登山等も実施し、家族相互の親睦を図るとともに、心身のリフレッシュを図ってきた。

(7) 婦人活動の促進

きのこ栽培等は家族の協力が不可欠であり、特に、婦人に期待するものが大きい。このため、婦人の能力や感覚を生かし、明るく活力ある経営と特用林産物の新しい利活用を図る目的で、平成6年度には、国の補助である林業婦人活動促進事業に取り組んだ。また、婦人活動として他のグループとの交流や先進地視察研修等を行ってきた。今後も積極的な活動を展開していくことにしている。

4. 今後の活動のあり方

今後は今までの活動を通じて習得した技術・知識を生かし、地域でのきのこ生産の増大と生産性が向上する活動をめざしていきたい。

その目標として、きのこ栽培における新技術の考案、品種選定、そして原木椎茸の良さのPRを促進していきたいと考えている。

県内の林研グループの中では最も歴史の浅い本会であるが、発足して22年が過ぎ、一定の成果も得てきたところである。今後の課題の一つは、今までの活動の成果をさらに地域にどのように反映させていくかということである。

今後とも、各種事業や活動に会員の夫人を含め、積極的に参加し、これらの課題に取り組むとともにきのこ栽培を核に意欲的な活動を展開し、地域林業の活性化に寄与したい。